

“大器晩成の歴史家” 保阪正康が語る「昭和史研究と我が人生」

11/6(水) 8:01 配信

|||| 現代ビジネス



[写真：現代ビジネス](#)

順風満帆ではない半生

11月初旬、紅葉が美しい晩秋の札幌に降り立った。青天の霹靂で決まった来年8月のオリンピック・マラソンに沸いていると思いきや、沸いていたのは市の中心部、中島公園の一角だった。

それは、北海道立文学館が主催した「保阪正康の仕事展」(8月31日～11月7日)である。週末とあって、「故郷の大家」の半生に触れようと、多数の中老年層が詰めかけたのだ。入館者は延べ3000人を超えた。道内ばかりか、遠く東京などからわざわざ足を運ぶ「保阪ファン」も少なくない。

12月で傘寿を迎える保阪氏は、言うまでもなく「昭和史研究の第一人者」だ。平成の天皇皇后にも、定期的に会食しながら昭和史を語っている。何より、今年5月に令和元年を迎えた際、NHKを始め、テレビ各局が解説を依頼したのが保阪氏だったことが、記憶に新しい。

保阪氏は、「帰納的な昭和史研究」を標榜し、過去に 4000 人に上る旧日本軍の関係者らを取材してきた。要は「上から目線」ではなく「下から目線」の研究ということだ。

その独特の歴史観は、「保阪史観」と称される。まるで精米を重ねて芳醇な清酒を醸造していくように、戦争体験者たちの証言を精査し、そこから「昭和の真実」を紡ぎ出している。

「地道に、こつこつと書いていく。その心中には歴史の中に葬りさられた人々の怨念を正確に残すべきだとの思いが込められていた」（保阪正康『近現代史に自らの存在を問う』）

「保阪正康の仕事展」は、「昭和には人類の歴史のすべてが詰まっている」という保阪氏の言葉で始まっていた。

野村六三副館長に話を聞いた。

「保阪氏は札幌市で生まれ、根室市の小学校、札幌市の中学校と高校を出た、わが北海道の誇りです。保阪氏の作品や作風にも、故郷・北海道が色濃く出ていますし、北海道にはどこよりも保阪ファンが多い。そこで、保阪氏の 80 年の半生を振り返る特別展を開くことにしたのです。特に、第 3 部は『保阪正康と北海道』としました。

会期中、延べ 500 人を集めての保阪氏の講演会、札幌にゆかりのあるノンフィクション作家・梯久美子さんとの対談、それに地元高校生との対話集会など、いくつものイベントを行いました。どれも大盛況で、改めて地元での保阪人気を実感しました」

「保阪正康の仕事展」の第 1 部は、「保阪正康の眼 『昭和史』と向き合う」。そこには、大判の「保阪正康年譜」が掲げられていた。

<1939 年 12 月 14 日、数学教師の父・孝(群馬県出身、横浜育ち)と母・マサ(北海道江別市出身)の長男として札幌市に生まれる。父は東北帝国大学卒業後数学教師として道内の学校に勤めていた。母方の祖父は石川県からの移住、祖母は広島県から入植した漢方医の家系。父方の祖父は、横浜の病院の医師(関東大震災で死亡)。父の勤務の関係で、生後間もなく江別市に移る……>

そして年譜の最後は、80 歳になる今年後半に、この展覧会を開催したことで終わっていた。中高年の入場者たちが、おそらく自分の人生に重ね合わせているのだろうが、じっくり足を止めて年譜に見入っている。

「文筆を生業としたいと考えたのは、十代の半ばである。自分に才能があるか否かは問うところではない。とにかくなるのだと決めた」(保阪正康『近現代史に自らの存在を問う』)

だが、その長大な年譜は、保阪氏の半生が、決して順風満帆ではなかったことを物語っていた。少年時代には反抗期もあったようで、京都の同志社大学に進学する前にも、一年浪人している。

高校の同級生という女性が、息子を連れて展覧会に来ていたので、高校時代の話を知ったら、破顔一笑した。

「それが全然覚えてないの。だって保阪君、午後になるといつも学校さぼって、どこかへ消えちゃったものだから」

大学卒業後も、就職したかった毎日新聞社に落とされている。結局、北海タイムスや電通 PR センターなど、何度か職を変えてから、朝日ソノラマで編集者となる。だが編集者生活も、2年ほどしか続かず、1968(昭和43)年、28歳でフリーランスの身となった。

それからの約20年は、長い「修行期間」が続いた。東條英機元首相のカツ夫人を始め、戦争時代のキーパーソンを数多く取材したのも、この時期だ。当時はまだ、「戦争の当事者たち」が生き残っていた。

48歳の時に、文藝春秋から出した『瀬島龍三ー参謀の昭和史』がベストセラーになった。それから、平成時代に入って、一連の昭和史モノを世に問うていく。

代表作となった『昭和陸軍の研究』(朝日新聞社、1999年)を刊行したのは59歳の時で、展示会のパネルでは、こう解説してあった。

<昭和陸軍は、なぜ無責任に戦争を始め、肉弾作戦、特攻作戦など多くの錯誤を犯したのか。昭和陸軍とはどのような組織だったのか。指導者たちはどのような理念、思想を持ってこの組織を動かしていたのか。そして太平洋戦争は何を目的に、どのように戦われたのか。組織の前史から戦後への影響まで、五百人余りの証言を得、可能な限りの資料を集め、その実体に迫った渾身の力作>

人柄に惹かれた「保阪親衛隊」

はて、私が保阪氏と知り合ったのは、いったいいつのことだったろう？ 眼前の長大な年譜を、改めて辿ってみた。

「2000(平成 12)年 61 歳」のところで、目が止まった。

<『昭和史 七つの謎』ベストセラーになる。『後藤田正晴』が中国で翻訳出版(新華社)。保阪訪中団(6 人)の団長として中国・東北地方を見て回る>

確かこの頃である。同僚で畏友の編集者・横山建城氏が、「素晴らしい作品を講談社文庫から出した」と意気揚々として、銀座で開いた保阪氏との会食に呼んでくれたのだ。『昭和史 七つの謎』(講談社文庫)は確かに傑作で、20 万部を超えるベストセラーとなった。

<第 1 話 日本の〈文化大革命〉は、なぜ起きたか？ 第 2 話 真珠湾奇襲攻撃で、なぜ上陸作戦を行わなかったか？ 第 3 話 戦前・戦時下の日本のスパイ合戦は、どのような内容だったか？ 第 4 話 〈東日本社会主義人民共和国〉は、誕生しえたか？ 第 5 話 なぜ陸軍の軍人だけが、東京裁判で絞首刑になったか？ 第 6 話 占領下で日本にはなぜ反 GHQ 地下運動はなかったか？ 第 7 話 M 資金とは何をさし、それはどのような戦後の闇を継いでいるか？ >

それぞれのエピソードが「活きた昭和史」となっている。特に、第 3 話の吉田茂元首相の自宅を、公安がスパイする話が印象的だった。

初対面の時、保阪氏と中国論で盛り上がったのを記憶している。保阪氏にとって、中国は昭和史研究の延長だった。一方の私にとって、昭和史は中国研究の延長だった。

その直後、いまは無き『月刊現代』という雑誌で編集者になって、中村勝行編集長に保阪担当にしてもらった。保阪氏に同行して、鹿児島の特攻隊記念館や北京などを回った。

編集者として保阪氏を担当したのは、月刊誌でほんの数回きりだったが、二つの「驚き」があった。一つは、保阪氏の飽くなき好奇心である。

北京の街を歩いていて、保阪氏が「あの人に話を聞いてみたい」と言う。指さした先には汚らしい格好の爺さんが座っていた。私は保阪氏と物乞いの間の通訳をしたのだ。その後、私は北京で 3 年間、出版社の駐在員を務めたが、物乞いの通訳を仰せつかったのは、後にも先にもただ一度だけだ。

もう一つは、編集者への信頼感である。保阪氏の手書き原稿は、いつも締め切り時間を過ぎた深夜に、ファックスがコトコトと音を立ててやってくる。

初めて『月刊現代』で担当した時、私は不遜にも、大御所の保阪氏に意見してしまった。ほとんどが、「ここは改行してはいかがでしょうか？」とか、「ここに『しかし』と接続詞を入れた方が読みやすくなるのではないのでしょうか」といった細部に関することだった。だが1カ所だけ、「このエピソードは〇〇ページの△△に移してはどうでしょうか？」と注文をつけた。10ページの原稿で、計30カ所ほどに上った。

ノンフィクション作家によっては、編集者がこういう進言をすると気分を害する。実際、その少し前に、ある当時の売れっ子作家に同じことをしたら激昂し、西麻布の事務所まで謝罪に駆けつけたものだ。

そのため、私はファックスを送った後、内心ビクビクしていたのだが、保阪氏は編集部で電話をかけてきて言った。

「こんなにきれいに直してくれて、ありがとう。おかげで本当に読みやすくなった」

この時からである。たとえ担当を何本抱えていても、保阪氏のものを最優先しようと私が心に決めたのは。

実際、出版・新聞業界の間で「保阪番」と呼ばれる担当編集者たちは、保阪氏に心酔している人ばかりだった。年に一度くらい各社の担当編集者が集まって「保阪氏を囲む会」を開くと(幹事はいつも平凡社新書の金澤智之編集長)、編集者たちが次々に挨拶する。「正月返上で新著の売り込みをします」「今回も自社(新聞社)の書評に保阪さんの新著の書評をねじ込みました」……。

彼らは、「保阪親衛隊」なのである。「編集者が心底、尊敬している作家」というのは、実は珍しい。編集者の多くは、サラリーマン的に一定期間、その作家を担当しているだけだからだ。

「十を知って一を書く」保阪史観

だいぶ脇道にそれてしまった。「保阪正康の仕事展」に戻ろう。展示会では「年表の一行を一冊に」という保阪氏の言葉を表題にして、これまでに著した 146 冊がズラリ並び、それぞれに解説がつけられていた。記念すべきデビュー作は、32 歳の時に、三島由紀夫の自決を描いた『死のう団事件 軍国主義下の狂信と弾圧』(1972 年)である。

著名な政治評論家・伊藤昌哉のベストセラー『実録 自民党戦国史—権力の研究』(朝日ノンラマ、1982 年)も、実は保阪氏がゴーストライターだったと本人から聞いたことがあるので、本当はもっと多いはずだ。

私は、自分が読んだことのある作品を数えてみた。後期のものが多く、全体の半分強くらいだった。唯一の小説『歪んだ回想録』も含まれている。

ノンフィクションばかり書いていると、ふと小説を書いてみたくなるものだ。ノンフィクションでは、登場人物のセリフ一つ取材するのに四苦八苦するが、小説では自由自在に書けるからだ。

展示会には、同志社大学時代に書いた演劇の脚本も展示してあった。特攻隊員をテーマにした『生ける屍』という作品だ。脚本家を目指し、シナリオ学校に通った時期もあったという。

それにしても、これだけ多作だと通常の作家なら、出版業界用語で言う「左手で書いた本」(もしくは「手抜き本」)も散見されるものだ。だが、私が読んだ保阪氏の著作のうち、ただの 1 冊たりともそのような本はない。すべて精魂込めて書いている。だから尊敬できるのだ。

加えて、晩年にベストセラーが続いているのも、保阪氏の特徴だ。若い頃に一発当てて、その余力で生きている作家も多い中、保阪氏は数少ない「右肩上がりのノンフィクション作家」なのである。

最近では、昨年 7 月に発売した『昭和の怪物 七つの謎』(講談社現代新書)が、20 万部のベストセラーになった。

<第一章 東條英機は何に脅えていたのか 第二章 石原莞爾は東條暗殺計画を知っていたのか 第三章 石原莞爾の「世界最終戦論」とは何だったのか 第四章 犬養毅は襲撃の影を見抜いていたのか 第五章 渡辺和子は死ぬまで誰を赦さなかったのか 第六章

瀬島龍三は史実をどう改竄したのか 第七章 吉田茂はなぜ護憲にこだわったのか>

前述の先輩編集者・中村勝行氏が、定年退職前に担当した最後の、そして乾坤一擲の作品で、抜群に面白い。

続いて、今年4月に発売した『続 昭和の怪物 七つの謎』（講談社現代新書）が7万部と、再びベストセラー街道を驀進中である。

<第一章 三島由紀夫は「自裁死」で何を訴えたのか 第二章 近衛文麿はなぜGHQに切り捨てられたのか 第三章 「農本主義者」橘孝三郎はなぜ五・一五事件に参加したのか 第四章 野村吉三郎は「真珠湾騙し討ち」の犯人だったのか 第五章 田中角栄は「自覚せざる社会主義者」だったのか 第六章 伊藤昌哉はなぜ「角栄嫌い」だったのか 第七章 後藤田正晴は「護憲」に何を託したのか>

どれも奥深いエピソードだ。ノンフィクション作家には、「一を知って十を書く」タイプもいるが、保阪氏の場合は「十を知って一を書く」。だから読者は安心して、「保阪史観」に身を委ねて読み進められる。

辿りつくのは命の哀しさ

「保阪ファンが年々増えていく現象を、どう分析していますか？」——昨年、『昭和の怪物 七つの謎』がベストセラーになった時、この質問を本人にぶつけてみた。すると、苦笑いしながらこう答えた。

「昭和から平成、平成から次代へと時代が変遷する中で、自分が書く昭和が『歴史』になったからではないかな」

確かにそれも一因だろう。昭和を二十数年生きた私には常識でも、平成生まれのいまの若者に新奇に映ることは多々あるからだ。

だが、それだけではないだろう。やはり、若い時分にコツコツと取材を続け、地道に実績を積み上げてきたことで、いま大樹が花開いているのだ。まさに「大器晩成」である。



展示会の年譜を追っていて、改めて知ったことがあった。保阪氏は1968(昭和43)年、朝日ソノラマを辞めてフリーランスになった直後に、金沢の神宮の長女・隆子さんと結婚していた。

普通は逆だろうと思う。結婚を決めたら、フリーランスが就職するものだ。後年、保阪夫妻とは、数ヶ月に一度、池袋で会食する習慣ができたが、ついに隆子夫人に、そのことを聞きそびれてしまった。

ある人は、「隆子さんが、『あなたは絶対に才能がある』と保阪氏を励まして、フリーランスとして世に送り出したのだ」と証言する。

私は、その通りではないかと思う。戦時中の「銃後の支え」ではないが、隆子夫人は、本当に人間としてよくできた方で、保阪夫人であると同時に、秘書役をも務めていた。

「ノンフィクション作家・保阪正康」とは、保阪夫妻の「合体物」ではないかと、いつも思っていた。確かご本人も、2004(平成16)年に菊池寛賞を受賞した際、授賞式の挨拶で、最前列に隆子夫人を立たせて、そのような趣旨のことを述べている。

だが、2013(平成25)年6月20日、隆子夫人は急逝してしまう。

私はその2週間ほど前にも、池袋のフレンチレストランで会食したばかりだった。隆子夫人はいつになく興奮気味に、店員に閉店時間を促されるまで、楽しかった韓国旅行の話などを語ってくれていたのだ。

葬儀の際、保阪氏は「家内が先に逝くなんて、考えたこともなかった……」と途方に暮れていた。

保阪氏は、それから一年以上経って、月刊『文藝春秋』(2014年10月号)に、『慟哭の手

記 50 枚 『亡き妻と私』という長文の「追悼文」を発表した。ノンフィクション作家が、自分の亡き妻に対する「慟哭の手記」を書くというのも、おそらく前代未聞だろう。

だが、実に感動的な手記で、世間でも評判になった。真の愛妻家とは、このような人と言うのだ。

「保阪正康の仕事展」のおしまいにも、隆子夫人の葬儀の際に保阪氏が読み上げた文章が展示してあった。

＜初めて出会った時、好奇心溢れる知的な眼差しで、私の話を一生懸命聞いてくれた妻、半世紀近くの歳月が流れ季節が幾つ巡っても、あの日の妻の輝く笑顔を、今も眩しく思い出します。どんな時も相手に寄り添い思いやる優しい妻でした……＞

その傍らには、北京郊外の万里の長城で撮った「ツーショット写真」が飾ってあった。真冬で二人ともオーバーを着込んでいるというのに、仲睦まじく寄り添っている。

私は夫妻と北京で会ったことも何度かあるが、隆子夫人の中国語は驚くほど上手で、保阪氏の通訳も兼ねていた。私が「北京では奥様の仕事もう一つ増えますね」と言ったら、はにかんだ様子を見せていた。そんな姿が脳裏を掠めて、静かに「ツーショット写真」に手を合わせた。

ちょうど館内を一巡した夕刻時、「ちょっとお茶でも飲もう」と声が掛かった。前日に東京から札幌へ来て、この日も朝から取材攻勢に遭っていた保阪氏本人だった。

われわれは、文学館の館内のカフェに移動した。閉館間際ということもあってか、広い店内に客はなく、保阪氏は好物のカフェラテを注文する。

「いやあ、故郷というのは、気が休まるものだね。北海道の人たちからは、こちらに戻って来て余生を過ごせと言われるんだ」

札幌でも分刻みの取材を受けていて、「休まる」もあったものではないと思うが、保阪氏にとって、札幌の空気は格別らしい。「そこの通りで、オリンピックのマラソンをやるらしいよ」などと、嬉しそうに解説してくれる。

同じカフェラテを啜りながら、しばし雑談する。このまま休ませてあげたい気もあったが、やはり職業病が頭を擡げてしまった。

「記者としてお聞きしますが、今後、執筆したいテーマは何ですか？」

すると保阪氏は、札幌時代の少年期に立ち返ったかのように、純朴な笑顔を見せ、朗々とした声で語りだした。

「実は3つあるんだ。来月で80歳を迎えても、まだまだステップアップしていきたいからね。」

一つ目は、出身地の北海道の家族のことを、二つ目は、東條英機、山本五十六、石橋湛山ら『明治17年生まれの男たち』のこと。そして何より三つ目は、東條英機の評伝を、もう一度書いてみたい。

東條英機の評伝は、40歳の手前で書いた(『東條英機と天皇の時代 上下巻』1979年、1980年、伝統と現代社)。だが、その2倍の80歳を迎えて再度、挑戦したい。当時といまとは、自分自身が変化したために、おそらく東條に対する向き合い方が違うものになると思うんだ」

私は思わず、「どう違うものになりそうでしょうか？」と聞き返した。すると保阪氏は、しばし中島公園の赤黄色に染まった紅葉群を見やりながら呟いた。

「結局、辿り着くのは、命の哀しさかな……」

そう言われてみれば、「保阪史観」の底流を常に流れる副旋律が、「命の哀しさ」である。

「昭和史研究の怪物」は、80代でどんな「昭和の怪物」を遺すのだろうか？

(※北海道立文学館の特別展「保阪正康の仕事」は、11月7日(木)まで開催中です)

近藤 大介